

郵便

逓賃ヲ設ケ

稱多非人ノ

放免脱刀立
禮ヲ許ス

三條ノ數則

政務二分ス

(九四四)

鴉片賣買ヲ申禁ス。又外人賣奴ノ禁ヲ嚴ニス。是支那人密ニ我が童兒ヲ海外ニ賣ル者アルニ因ルナリ。九月衆庶ノ氏ヲ稱スルヲ許ス。四年二月郵便ヲ以テ公私ノ信書ヲ傳達ス。四月平民ノ路上乘馬ヲ許ス。八月始メテ邏卒ヲ東京ニ置ク。後之ヲ巡查ト改メ、全國ニ置キテ人民ノ安寧ヲ保護セシム。穢多非人ノ稱ヲ廢シ、民籍ニ編入ス。時ニ穢多廿八萬三千餘、非人二萬三千四百餘、製皮者ノ類七萬九千餘ニシテ、賤民ノ數殆四十萬人許ナリキ。士民ニ散髮脱刀及立禮ヲ許ス。五年正月、松平容保、榎本武揚ノ禁錮ヲ免シ、徳川慶喜及一時朝命ニ抗シタリシ舊藩主等ヲ赦シ、位記ヲ賜フ。神祇官ヲ廢シテ、教部省トナシ、三條ノ數則ヲ設ク。第一、敬神愛國ノ旨ヲ體スベキ事。第二天理人道ヲ明ニスベキ事。第三、皇上ヲ奉戴シ、朝旨ヲ遵守セシムベキ事是ナリ。以テ宗教ノ模範トシ、大ニ人心ヲ和シ、朝廷ノ政治ニ從ハシム。又教導職ヲ置キ、分チテ拾四級トシ、一級ハ二等官ニ準ズ。又僧侶ハ平民ト全クシテ、髮ヲ蓄ヘ、肉食妻帯シテ、姓氏ヲ稱スルヲ許ス。後又教部省ヲ廢シテ、内務省ニ管セシメ、宗教上ノコトハ各宗管長ヲシテ之ヲ掌ラシメ、政教途ニ二分シタリ。四月、莊家、名主等ノ稱ヲ改メテ、正副戸

正副戸長

天皇西幸シ

給フ

國立銀行ヲ

設ク

太陽曆ヲ領

布ス

紀元節大祭

日ヲ定メ日

曜日ヲ休日

トス

證券印紙ヲ

發行ス

刺殺行ハル

長トス。五月、天皇山陽、西海ニ巡幸シ給フ。車駕鹿兒島ニ到リ、島津久光ヲ行在所ニ召ス。久光病ト稱シテ、應セズ。封事十餘條ヲ奉リ、テ時事ヲ痛論ス。八月、國立銀行ヲ設ク。十月、奴婢娼妓等、僱役者ノ年限ヲ定ム。太陽曆ヲ用非、五年十二月三日ヲ以テ、六年一月一日トス。紀元節ヲ設ク、天皇節ト並ベテ祝日トス。實ニ、神武天皇紀元ヨリ二千五百三十二年ナリ。又一晝夜ヲ二十四時ニ區分シ、大祭日ヲ定メ、日曜日ヲ以テ、諸官衙學校等ノ休業日トス。六年一月、五節句ヲ廢ス。二月、證券印紙ヲ發行シ、金錢上或ハ契約書等ハ、皆其ノ額ニ應シテ之ヲ貼付セシメ、若貼付セザル者ハ、裁判所ニ訴フトモ、之ヲ受理セザルコトトス。三月、外人ト結婚スルヲ許ス。天皇御髮ヲ斷チ、洋服ヲ着給フ。皇后、皇太后モ、亦描黛涅齒ヲ止メ給フ。

○九刺殺及謀叛

朝廷ノ改革甚急激ナリシヲ以テ、守舊ノ徒之ヲ快シトセズ、時ニ叛亂ヲ企ツル者アリキ。二年、參與橫井平四郎、兵部大輔大村益二郎、刺ニ遇フ。三年、米澤藩士雲井龍雄政體ヲ改メ、封建ニ復センコトヲ企テ、事成ラズシテ囚ハル。四年、參與廣澤兵助モ亦刺殺セラル。播磨、但馬ノ民等、穢多非人者

等ノ平民ノ列ニ加ハリシヲ憤リ、縣廳ヲ襲ヒ官吏ヲ殺傷ス。五年、信濃越後ノ民亂ヲ起ス。朝廷神佛混淆ヲ禁シ、神道ヲ興復セシヨリ、佛法ヲ廢スルナラシトノ謬見ヲ抱キ、海内大ニ騷擾ス。當時河水疏通ノ工事ニ借役セラレシ會津ノ人士等、土民二萬餘人ト佛法再興ヲ名トシ、徳川氏ノ再興ノ旗ヲ翻シ、火ヲ放チテ新黨ニ迫ル。敦賀、大分ノ士民、改曆徵兵ノ事ヲ憤リ、教部省ノ旨趣ヲ誤解シテ亂ヲ起ス。鳥羽、島根、北條等ノ亂民、徵兵令中ニ血税ノ字アルヲ誤解シ、壯丁ノ血液ヲ搾リテ國用ニ供スルモノト認メ亂ヲナス。福岡ノ民等、旱災ハ電信機ノ致ス所ナリト誤想シ、其ノ線ヲ切斷シテ縣廳ニ迫リ、京都、三浦、廣島、青森等ノ民モ、改曆及徵兵等ノ事ヨリ亂ヲ起ス。又名東縣ノ亂民、選卒ヲ捕ヘ、戸長ヲ傷ク、村落ヲ燒ク。亂毎ニ鎮壓兵ヲ發シテ之ヲ鎮撫セシム。奥羽ノ殘黨分散シテ不軌ヲ圖ル者多シ、武藏、忍藩並ニ上野、高崎等ノ農民、租税ノ不平等ヲ訴ヘ、京都ノ民衆ハ、天皇ノ東幸ヲ停メ奉ラント欲シテ騷擾シ、松代藩民ハ伊那ノ衆ト共ニ、紙幣兌換、貢米折金ヲ争ヒテ亂ヲ起ス。石見ノ濱田ニハ、浮浪ノ士民亂ヲ企テ、周防ノ山口ニハ、大樂源太郎等兵制ノ改定ニ服セズシテ亂ヲ起ス。後小

開成所

大學校

大學、南校、東校

實進生、留學生

式部省、學制ヲ定ム

私立洋學校

河真女等山口ノ強寇ト結ビ、愛宕通旭、其ノ臣比喜多高綱、及外山光輔ト相通シテ主上ヲ西京ニ奉テ兵ヲ起サントセシニ、事覺ハレ、通旭、光輔ハ自盡ヲ命ゼラレ、高綱、真女等九人ハ斬ニ處セラレタリ。

○十教育 維新ノ初メ開成所ヲ以テ學校トシ、專洋學ヲ修メシム。二年六月、昇平校ヲ大學校ト稱シ、開成學校、醫學校、及病院軍務官ニ屬セシモノ等ヲ監理セシム。

當時、皇漢ノ二科ヲ昇平校ニ置キ、洋學ト並ビ修メシメントセシカド、常ニ議論ノ調和セザルヲ以テ、終ニ之ヲ廢セリ。既ニシテ大學校ヲ改メテ大學トシ、開成校ヲ南校ト稱シ、醫學校ヲ東校ト稱ス。三年、學則ヲ改メ、諸藩ヨリ學生ヲ撰拔シ、東南兩校ニ入ラシム。之ヲ實進生ト云ヒ、其ノ海外ニ留學ヲ命セラレタル者ヲ留學生ト云フ。四年七月、大學ヲ改メテ文部省トナス。大木喬任文部卿タリ。六年、學制ヲ改メ、大中小學區ヲ分チ、學齡ヲ定メ、男女六歳以上ハ皆學ニ就カシム。小學教則ヲ講習シ、各地ヨリ教員ヲ募集シテ之ヲ養成ス。文久ノ初メ、幕府閣醫ポールド井ノヲ聘シテ、長崎及大坂ニ病院ヲ建ツ。東校起ルニ及ビ之ヲ招聘シテ、其ノ教官トス。信濃ノ人村上英俊佛學ヲ善クス。嘉永年間、江戸ニ來

リ、塾舎ヲ設ケテ教授ス。豊前ノ人福澤諭吉、慶應年間ヨリ、江戸ニ慶應義塾ヲ設ケテ、英學ヲ教授セリ。當時各國ノ交際上及貿易上、英語最必要ナリシヲ以テ、入塾スル者頗多カリキ。後又獨乙學ヲ學ブ者アリ、而シテ蘭語ヲ學ブ者ハ漸其ノ跡ヲ絶ツ。是ヨリ公私ノ學校漸次増加シ、終ニ現時ノ盛況ヲ呈スルニ至レリ。

○十一 地租及土地ノ名稱

初メ港ヲ横濱ニ開クニ當リ、民有ノ田畑ヲ收メテ市街ヲ設ケ、地券ヲ發シテ租ヲ徵ス。因リテ其ノ法ニ倣ハントシ、先之ヲ東京ニ行フ。六年、遂ニ全國田地貢租ノ舊法ヲ廢シ、土地ノ自由賣買ヲ許シ、地券ヲ所有主ニ與ヘ、地價ヲ定メ、百分ノ三ノ租ヲ徵ス。是ニ至リ各地ノ田租輕重アリシモノ一定セリ。又我が國ハ元來農ヲ重シ、商ヲ輕クシタリシヨリ、租稅ハ概農ニ課シ、商稅ハ殊ニ輕カリシカドモ、泰西ノ租稅法ヲ參照シテ、商ニモ租稅ヲ課スルニ至レリ。新租法ノ出ヅルニ及ビテ、彼此増減アリシカバ、頑民之ヲ恨ミ、或ハ蜂起シテ政府ニ訴フル所アラントシタリ。九年十二月、北海道ハ開拓尙淺キヲ以テ、姑ク地價百分ノ一ヲ以テ地租トナス。十年一月、減稅シテ内地ノ租稅ヲ百分ノ二半トス。此ノ如クニシテ歲入甚豐富トナリシヲ以

地券ヲ與ヘ
地價ヲ定メ
租ヲ徵ス

土地ノ名稱

テ、各省爭ヒテ新事業ヲ起サント欲シ、爲ニ歲出モ亦多額トナリタリ。曩ニ大藏卿大久保利通使シテ歐米ニ在リ、大藏大輔井上馨其ノ代理タリシニ、出金ノ要求非常ニ夥多ナリシヲ以テ、六年四月、建議シテ各省卿ヲシテ參議ヲ兼テシメ、各省熟議シテ事ヲ處セントス。議合ハズシテ辭職ス。朝廷乃參議大隈重信ヲシテ、權ニ大藏省事務總裁トス。初メ土地ヲ別チテ皇宮、神宮、官廳有、官有、公有、私有、除地ノ七種トシタリシニ、六年十一月、之ヲ改メ、大別シテ官有地、民有地トシ、小別シテ官有地ヲ四種トシ、民有地ヲ三種トス。民有地ハ第一種、第二種ニ該當スルモノ、外地租ヲ免ス。

○十二 征韓論

初メ幕府ノ朝鮮國ト修好セルニ當リ、彼我同等ノ交際タリシヲ以テ、往復ノ文書ニハ、將軍自稱シテ大君ト記シタリ。而シテ是獨朝鮮ニ對スルノミニアラズ。幕府ガ外國ニ對スル時ノ稱號ハ、常ニ此ノ二字ヲ用ヰタリシナリ。慶喜大政ヲ奉還スルニ及ビ、朝廷宗對馬守ヲ朝鮮ニ遣シ、舊好ヲ尋メ、且政體ノ變更及天皇即位ノ事ヲ報ゼシム。而シテ其ノ書中、天皇詔勅等ノ文字アリシヲ以テ、朝鮮ハ我が日本ニ大君政府即幕府ノ上ニ一層高等ナル政

修交使ヲ朝
鮮ニ遣シ維
新道ヲ維
大新報

朝鮮我が使ヲ拒ム

征韓論ノ起

西郷隆盛ノ憤慨

(九五〇)

府即朝廷ト云フモノアルヲ知レリ。然レドモ又一方ニ於テハ、或ハ亂臣賊子ノ新ニ起リテ、其ノ稱ヲ僭スルニハ非ザルカトノ疑念ヲ起シ、後説ヲ信ズルコト厚カリシヲ以テ、遂ニ我が使ヲ拒ミタリ。太政官ヲ設クルニ及ビ、外國ニ關スル事ハ外務卿ヲ以テ處理セシムル旨ヲ朝鮮ニ通報セシニ、亦斥ケテ顧ミザリキ。是ニ於テ外務卿及太政官等ヨリ數回ノ諭告書ヲ送リテ其ノ誤謬ヲ正サントセシニ、朝鮮猶頑然トシテ改メズ。後説ヲ信ズルコト愈確固ナルニ至レリ。以上ハ即征韓論ノ因リテ起リシ所ナリ。當時明治三年武人ハ無聊ニ苦ミ、心竊ニ事アルヲ望ミタリシヲ以テ、大ニ朝鮮ノ無禮ヲ憤リ、問罪ヲ名トシテ師ヲ起サント欲スル者多カリキ。西郷隆盛豪邁ニシテ理論ヲ好マズ。當時賢良並ビ進ミ、各其ノ意ヲ陳シテ善治ヲ得ント欲シ、却リテ其ノ實ノ擧ガラザルヲ歎シ、慨然トシテ曰ハク、能ク東亞細亞ヲ威服スルヲ得テ、始メテ歐米ト齒スルヲ得ベシ。區々タル内治ニ汲々トシテ、遠大ノ方策ヲ慮ラザルハ、余ノ知ル所ニアラザルナリト。時ニ朝鮮政府ニ於テハ、大院君季是應政ヲ執リ、頑剛ニ事ヲ處シ、更ニ他ヲ顧ミズ。遂ニ佛蘭西人、亞米利加人等ト事端ヲ生シ、其ノ意氣大ニ傲ル、是ヲ以

朝鮮東萊府使ノ無禮

征韓論起ル

テ我が國トノ交渉事件ニ就キ、毫モ顧慮スル所アラザリキ。六年、朝鮮東萊府使我が國歐米ノ文物ヲ輸入スルヲ卑ミ、帥梁館我が官吏ノ門前ニ書箋ヲ貼付シテ大ニ侮辱ヲ加ヘタリ我が吏之ヲ報ズルニ及ビ、征韓論一層其ノ度ヲ高メタリ。征韓論ハ西郷隆盛、桐野利秋等ノ如キ武人派ニ於テ最勢力アリ。文人派ニ於テ此ノ説ヲ唱道シタル者ハ、副島種臣、後藤象二郎、板垣退助、江藤新平等ノ數人ナリキ。初メ副島種臣使シテ清國ニ在リ、朝鮮ノ事ヲ聞キ、清國ニ質シテ曰ハク、「朝鮮ハ屬國ナリヤ否ヤ」ト。清國答フルニ其ノ屬國ナルヲ以テセント欲ス。然レトモ其ノ談判ノ關係アラソトテ恐レ、終ニ答フルニ其ノ否ラザルヲ以テセリ。種臣清國ヨリ歸ルニ及ビ、主トシテ征韓論ヲ朝廷ニ提出ス。後藤、板垣、江藤、ノ徒モ亦輓近政府ノ朋黨ヲ生シ、内閣ニ関クテ見テ、之レ矯正セント欲シ、種臣ノ説ヲ翼賛ス。隆盛等曰ハク、朝鮮ノ無禮固ヨリ論ヲ俟タズ。然レドモ妄ニ之ヲ伐ツハ不可ナリ。先使ヲ遣シテ彼ノ過ヲ覺ラシメ、彼猶強硬ニシテ從ハズバ、直ニ兵ヲ發シテ之ヲ討滅スベシト。且自其ノ大使タラソトテ乞フ。勝安芳、大隈重信、大木喬任ノ如キハ素ヨリ之ニ反對ス。然レドモ廟議ノ大半ハ既ニ征韓ニ決定シ、太

岩倉大使等
歸朝ス

(九五二)
政大臣三條實美ニ就キテ策ヲ進ム。實美事極メテ重大ナルヲ以テ、苦諭シテ之ヲ止メント欲ス。隆盛等聽カズ。時ニ天皇ハ幸シテ箱根ニ坐シマセリ。實美歸シテ之ヲ奏ス。乃詔シ給ハク、岩倉大使一行ノ歸朝ヲ俟チテ事ヲ決セン。初メ大使ノ發スルニ臨ミ、廷議約シテ曰ハク、朝廷ノ事大小トナク、止ムヲ得ザル外ハ大使ノ復命ヲ俟チテ處斷スベシト。聖意蓋茲ニ基ケリ。六年九月大使歸朝シ、征韓ノ議ヲ聽キ、先其ノ不可ナルヲ極論セリ。抑、大使ノ歐米ヲ巡回スルニ當リ、文物ノ隆盛ナル、武備ノ嚴整ナル、到底我が國ノ現狀ヲ以テ敵シ得ベキニ非ザルヲ觀、先内ヲ治メテ實力ヲ養成シ、以テ萬全ノ策ヲ取ラザルベカラザルヲ察知ス。然ルニ歸朝スルニ及ビ、圖ヲザリキ。國內征韓論盛ニシテ將ニ出師ニ決セントストハ。故ニ絶對ノ反對論ヲ提出シテ、其ノ不可ナルヲ論辯シタリ。是ニ於テ朝廷ハ征韓ヲ是トスル者ト、之ヲ非トスル者トノ二大派ニ分レ、是トスル者ハ三條實美ニ迫リテ救裁ヲ請ハノコトヲ求ムルコト益々急ナリ。實美遂ニ病ヲ以テ辭ス。具視モ亦數日ノ間朝セズ。十月二十日、車駕實美ノ邸ニ臨ミ、敕シテ病ヲ養フコトヲ許シ給フ。然レドモ其ノ辭職ヲ許シ給ハズ。車駕亦具視ノ第二臨

朝廷二大派
ニ分ル

征韓ノ會議
大久保利通
ノ駁論

ミ、親諭シテ實美ニ代リテ事ヲ視シメ給フ。具視乃先御前會議ヲ開キテ之ヲ決セントス。隆盛主トシテ征韓ノ要ヲ説キ、速ニ師ヲ出ダスベキヲ唱フ。大久保利通徐ニ之ヲ駁シテ曰ハク、試ニ方今我が國ノ形勢ヲ熟視セヨ。内治未整ハザルニ非ズヤ。民業未振ハザルニ非ズヤ。政府ノ財政ハ收支相償ハズ、國債ヲ募ルコト二回、頻ニ稅率ヲ増シ、紙幣ヲ増發シ、百姓之ニ苦ムニ非ズヤ。是ノ時ニ當リテ妄ニ無謀ノ兵ヲ起サバ、益々疲弊シ、國力殆給セザルニ至ラン。而シテ北ニハ露國ノ邊境ヲ窺フアリ。モシ陰ニ朝鮮ト通ズルコトアラソニハ、何ヲ以テ之ニ當ラシ。加之方今英佛諸國ハ護衛兵ヲ派遣シ、毫モ信ヲ我が國ニ措カズ。獨立帝國ノ躰面ヲ汚損セルコト實ニ大ナリト謂フベシ。然ルヲ却リテ傍觀袖手シ、獨リ朝鮮ノ如キ小國ニ向ヒテ事ヲ舉ゲントス。是レ遠キヲ察シテ近キヲ察セザルモノニアラズヤ。試ミニ問ハソ、朝鮮ヲ征討シテ幾多ノ利益アリトスルカ。其ノ得失相償ハザルハ、火ヲ觀ルヨリモ明ナラン。若シ夫名分ヲ明ニスルヲ以テ目的トナストセバ尙可ナリ。然ルヲ論者ハ曰ハク、先使ヲ遣シ、然ル後發セント。是信ニ無名ノ師ト謂フベキナリ。既ニ利害得失ノ相償ハザルヲ知り、名分ノ未正シ

征韓論者職ヲ辭ス

カラザルヲ以テ、妄ニ兵ヲ起シテ國帑ヲ空クシ、以テ外ニ當ラントス。無謀モ亦甚シト。痛論數刻。朝議遂ニ之ヲ非トシ、征韓ノ議茲ニ局ヲ結ブヲ得タリ。是ニ於テ參議陸軍大將近衛都督西鄉隆盛、及陸軍少將桐野利秋、篠原國幹等薩藩出身ノ武人概袖ヲ列テ職ヲ辭シ、鹿兒島ニ退ク。參議兼外務省事務總裁副島種臣、參議兼左院事務總裁後藤象二郎、參議板垣退助、江藤新平モ亦職ヲ辭ス。昔之ヲ聽ス。岩倉具視、大久保利通等專事ヲ取リ、二十五日參議大隈重信ヲ兼大藏卿ニ參議大木喬任ヲ兼司法卿ニ、工部大輔伊藤博文ヲ參議兼工部卿ニ、海軍大輔勝安芳ヲ參議兼海軍卿ニ任マ、二十八日、特命全權公使寺島宗則ヲ參議兼外務卿トナス。隆盛等ノ冠ヲ掛ケテ退隱スルニ當リ、朝野騷然トシテ、亂階ノ此ニ崩ス、丁ナキカヲ危ミタリ。

(九五四)

政規制定ノ

○十三 民撰議院 六年十月、征韓ノ議合ハズシテ五參議職ヲ辭スルニ及ビ、從來朋黨軋轢ノ弊ヲ一洗シ、真正ニ國利民福ヲ圖ルニハ、立憲政體ヲ確立セザルベカラザルコトヲ悟リ、木戸孝允先政規制定ノ議ヲ提出ス。政規ハ方今ノ所謂憲法ナリ。七年一月、前參議副島種臣、後藤象二郎、板垣退助、江藤新平前東京

民撰議院設立ノ建議

府知事由利公正、前左院少議官小室信夫、前大藏大丞岡本健三郎、及古澤滋ノ八人、民撰議院設立ノ建議ヲナス。其ノ要ニ曰ハク、代議士ヲ諸國ヨリ出シ、公議輿論ヲ採リテ國憲ヲ樹立シ、以テ有司專制ノ弊ヲ矯メ、民權是ニ於テ振興シ、國本是ニ於テ鞏固ナラント。是ヨリ公議輿論ノ文字ハ、朝野ノ間ニ喧シク、雷同附和ノ徒漸増加シタリ。宮内省四等出仕加藤弘之書ヲ作リテ之ヲ駁シ、我が人文未開クズ、暫後年ヲ俟ント申説ス。當時政府ニアル者皆弘之ノ説ヲ是トシテ尙早論ヲ唱ヘタリ。而シテ世論ハ急進漸進ノ二派ニ分レ、新聞雜誌等ニ依リ、論難攻撃甚熾ナリキ。原來新聞雜誌ハ時事ノ報道ヲ務トセシニ、此ノ時ヨリ政治上ノ議論ヲ掲グルニ至レリ。五月、敕ヲ發シテ地方官會議ヲ開カントテ天下ニ告ケ給フ。曰ハク、朕踐祚ノ初メ神明ニ誓ヒシ旨意ニ基キ、漸之ヲ擴充シ、全國人民ノ代議人ヲ召集シ、公議輿論ヲ以テ律法ヲ定メ上下協和、民情暢達ノ路ヲ開キ、全國人民ヲシテ各其ノ業ニ安ソマ、以テ國家ノ重キヲ擔任スベキ義務アルヲ知ラシメ、コトヲ期ス。故ニ先地方ノ長官ヲ召集シ、人民ニ代リテ協同公議セシメ、乃議院憲法ヲ頒布ス。各員其之ヲ遵守セヨト此ノ後佐賀ノ亂及臺

地方官會議開設ノ詔

海ノ役等相續キテ起リ、内外多事ナリシヲ以テ、民撰議院論ハ誓之ヲ唱フル者アラザリキ。

○十四 佐賀ノ亂

江藤新平征韓ノ議行ハレズ、民撰議院設立ノ建言モ亦意ノ如クナラサルヲ以テ、快々トシテ樂マス。時ニ舊佐賀藩士ニ征韓黨ト愛國黨トノ二派アリ。征韓ト封建トヲ名トシテ亂ヲ起サント欲シ、新平ヲ推サントス。新平以爲ヘラク。西郷鹿兒島ニ在リ。板垣土佐ニ在リ。我今兵ヲ起サバ彼等必應ズベシト。七年二月一日、島義勇等二千五百餘人ト兵ヲ佐賀ニ起シ、小野商會ヲ襲ヒテ其ノ金銀貨物ヲ掠取ス。朝廷直ニ熊本鎮臺ニ令シテ之ヲ討タシメ、參議兼内務卿大久保利通ニ命ヲ往キテ之ヲ鎮撫セシム。利通權大判事河野敏鎌、大檢事岸良兼義等ト共ニ佐賀ニ赴ク。又陸軍少將野津鎮雄ニ命ヲ砲兵一大隊歩兵二大隊ヲ率テ熊本ニ赴カシメ、陸軍少將島尾小彌太ヲ、大坂鎮臺ニ山田顯義ヲ西海道ニ外務少輔山口尙芳ヲ長崎ニ派遣ス。内閣顧問島津久光自請ヒテ鹿兒島ニ往キ、新平等ニ應援スル者ナカラシム。二十三日、嘉彰親王ヲ征討總督トシ、陸軍中將山縣有朋ヲ參軍トナシ、近衛及名古屋以西四鎮臺ノ兵ヲ

江藤新平兵ヲ率テ

嘉彰親王ヲ征討總督トナシ

新平等誅ニ伏ス

ヲ佐賀ノ賊ヲ討タシメラル。征討軍未到ラザルニ利通博多ニ於テ部署ヲ定メ、三月一日三道ヨリ兵ヲ進ム。賊禦コト能ハズ、相繼ギテ降伏ス。新平義勇等遁レテ鹿兒島ニ入り、隆盛ニ依ラントス。隆盛應ゼズ。更ニ又土佐ニ之ク。義勇ハ鹿兒島ニ捕ハレ、新平ハ土佐ニ捕ハル。乃總督、宮ヲシテ之ヲ處セシメラル。利通之ニ參シ、敏鎌之ヲ裁ス。四月十三日、新平義勇ヲ梟首シ、其ノ徒十人ヲ斬リ、他ハ輕重ニ依リ、懲役、禁錮、除族等ニ處ス。亂此ニ到リテ平ク。此ノ月、島津久光東京ニ歸リ、左大臣ニ任ゼラル。

○十五 臺灣ノ役

臺灣ハ琉球ノ西部ニ位スル一島ニシテ、東西二部ニ別ル。西部ヲ熟蕃ト云フ。清國ニ屬セリ。東部ヲ生蕃ト云フ。所屬定マラズ。生蕃部落十八ニ分レ、其ノ俗獐狂ニシテ、牡丹社最殘忍ナリ。四年七月琉球ノ民五十四人漂流シテ臺灣ニ到リ、生蕃ノ爲ニ虐殺セラレ、鹿兒島縣參事大山綱良書ヲ上リテ之ヲ伐タント乞フ。許サズ。六年三月、小田縣ノ漂民四人モ亦其ノ害ニ遇フ。是ヨリ先副島種臣好盟ヲ訂セントシテ使シテ清國ニ在リ。乃併セテ臺灣生蕃ノコトヲ問ハシム。清國告グルニ其ノ版圖内ニアラサルヲ以テス。朝廷征臺

琉球ノ民臺灣生蕃ノ爲ニ虐殺セラレ

四郷從道部
督トナリ
臺灣ヲ征ス

(九五八)

ノ論盛ナリ。時ニ大久保利通出テ、佐賀ニアリ。本戸孝允征臺ノ不可ヲ論シ、益
内治ヲ盛ニスベキヲ説ク。議納レラレズ。七年四月、終ニ出師ニ決ス。陸軍中將西
郷從道臺灣事務都督タリ。陸軍少將谷干城、海軍少將赤松則良參軍タリ。兵三千
六百五十餘人ヲ率テ、日進、孟春、大有等ノ軍艦ヲ長崎ニ出帆シ、期近キニ在
リ。孝允終ニ職ヲ辭ス。書中征臺ノ非ヲ論ズルコト頗切ナリ。米英ノ公使亦之
ヲ拒ム。朝廷利通ヲシテ長崎ニ抵リテ之ヲ止メシム。從道以下聽カズシテ曰ハ
ク、清國若異議ヲ起サバ、吾等ヲ以テ國政ニ服セザル脱徒ナリト云ハハ則可ナ
ラント。五月終ニ發ス。乃先少佐福島九成ヲ清國廈門ニ遣シ、督ヲ兵部尙書閩浙
總督李鶴年ニ與ヘテ征臺ノ事ヲ報シ、且沿岸ノ清民ヲシテ生蕃ノ軍需ヲ資ク
ル者ナカラシメンコトヲ請フ。我が軍臺灣ニ至ル。諸蕃爭ヒテ降ル。牡丹社獨
服セズ。乃竹社、風港、石門ノ三道ヨリ之ヲ攻メ、遂ニ酋長阿祿父子ヲ斬ル。生蕃ノ
二蕃降ル者前後相踵ク、即龜山ヲ以テ本營トシ、久屯ノ計畫ヲナス。此ノ役戰死
スル者僅ニ十二人ナリシカド、炎熱甚シク、加フルニ霖雨數旬ナリシヲ以テ、病
ミテ斃ル、者五百餘人ニ及ヒタリ云フ。

臺灣降ル

大久保利通
清國ニ使シ
臺灣ノ事ヲ
訂ス

初メ我が軍ノ臺灣ニ入ルニ當リ、柳原前光命ヲ奉テ清國ニ赴キ、出師ノ事ヲ
告グ。是ヨリ先清國書ヲ我が外務省ニ寄セテ曰ハク、臺灣ハ我が邦土ナリ。妄ニ
兵ヲ動カスベキニアラズト。又使テ臺灣ニ遣シ、都督ニ説キテ曰ハク、臺灣若曲
ナラバ我之ヲ資ムベシ、請フ師ヲ回セト。從道其ノ詔命ナルヲ論ワテ聽カズ。彼
止ムコトヲ得ズシテ去ル。八月、大久保利通ヲ清國ニ遣シ、臺灣ノ事ヲ訂セシ
ム。往復七回ニシテ議尙調ハズ。利通大ニ憤リ、衣ヲ拂ヒテ歸ラントス。會、英公使
ウヱート之ヲ和ス。乃三條ヲ約シ、償金五十萬兩清銀ヲ得、還リテ臺灣ニ至リ、十一月
從道ト共ニ凱旋セリ。

政體改革ノ
詔

○十六 元老院大審院及地方官會議ノ創立 八年四月詔シテ政體
ヲ改革シ、元老院ヲ設ク、地方官會議ヲ開キ、又大審院ヲ置キ、司法行政ノ區分ヲ
明瞭ナラシメ給ヘリ。是實ニ立憲政體ノ段階ヲ進メシモノナリ。其ノ詔ニ曰ハ
ク、朕即位ノ初、首トシテ群臣ヲ會シ、五事ヲ以テ神明ニ誓ヒ、國是ヲ定メ、萬民保
全ノ道ヲ求ム。幸ニ祖宗ノ靈ト群臣ノ力トニ賴リ、以テ今日ノ小康ヲ得タリ。願
フニ中興日淺ク、内治ノ事當ニ振作更張スベキモノ少シトセズ。朕今舊文ノ意

地方官會議
ヲ開ク

ヲ擴充シ、茲ニ元老院ヲ設ケ、以テ立法ノ源ヲ廣メ、大審院ヲ置キ、以テ審判ノ權
ヲ奪クシ、又地方官ヲ召集シ、以テ民情ヲ通シ、公益ヲ圖リ、漸次ニ國家立憲ノ政
體ヲ立テ、汝衆庶ト俱ニ其ノ慶ニ賴ラント欲ス。汝衆庶或ハ奮ニ泥ミ、故ニ慣ル
ハ、コトナク、又或ハ進ムニ輕ク、爲スニ急ナルコトナク、其ノ能ク朕ガ旨ヲ體シ
テ、翼贊スル所アレト。六月、地方官會議ヲ東京ニ開カル。天皇親臨シテ開會式
ヲ行ハセ給フ。同月、讒謗律ヲ作り、新聞紙條令ヲ改正シ、妄ニ言論スルヲ得ザ
ラシム。

朝鮮通商條
約成ル

○十七 江華灣ノ變 八年九月、我が軍艦朝鮮江華灣ニ於テ砲撃セラレ。我
ガ兵應戰シテ、其ノ城ヲ拔キ、四十餘人ヲ殺獲セリ。報達スルニ及ビ、上下駭然タ
リ。征韓ノ論再起ル。翌年二月、黒田清隆ヲ特命全權辦理大臣トシ、井上馨ヲ副ト
シテ往キテ之ヲ治メシメ、通商條約ヲ締結ス。朝鮮文化八年使聘ヲ絶チシヨリ、
六十餘年ニシテ再相交通スルニ至レリ。

車駕巡幸函
館ニ至ル

○十八 車駕東巡 九年六月、地方行政略整ヒタルヲ以テ、天皇右大臣岩倉
具視等ヲ從ヘ、東北地方ヲ巡幸シテ函館ニ至リ給ヒ、七月、海路東京ニ還幸シ給

神風黨ノ亂

ヘリ。途次宇都宮ヨリ日光ニ詣リ、岩代須賀川ノ馬市、半田ノ銀鑛ヲ閱覽シ、福島
宮城ヲ經テ岩手ヲ巡リ、三本木ニ至リ、新渡部傳薩盛ノ開墾ノ功ヲ追賞シ、又
廣澤安任薩士ノ牧畜ノ功ヲ賞シ賜ヒキ。八月、三條實美及巖ニ巡行
ニ供奉セザリシ參議等ヲシテ北海道ヲ巡視セシメラル。

秋月藩士賊
本ノ賊ニ應

○十九 熊本及山口ノ亂 征韓ノ論協ハザリシヨリ、西南諸藩ノ士族中不
平ヲ抱キ、再武斷政治トナサント欲スル者多カリキ。七年ニハ佐賀ノ亂アリシ
ニ、今又熊本ニ神風黨ト稱スル一種ノ頑黨起レリ。九年十月二十四日、大野鐵平、
加屋齊堅、上野謙吾等、其ノ黨二百餘人ト、夜火ヲ放チテ熊本鎮臺及該司令長官
種田政明、縣令安岡其亮、參事小關敬直ノ居宅ヲ襲フ。政明ハ殺サレ、其亮敬直ハ
負傷シ、後死ニ至ル。其ノ他死傷二百餘人アリ。翌日鎮臺兵之ヲ擊ツ。鐵平、齊堅、謙
吾等之ニ死シ、餘ハ概自首シ或ハ逃亡シタリ。二十七日、舊秋月藩士宮崎車之
助、今村百太郎、益田靜方等四百餘人、兵ヲ起シテ熊本ノ賊ニ應ズ。鎮臺兵擊チテ
之ヲ走ラス。賊轉テ豊津ニ入ル。小倉分營ノ兵擊チテ之ヲ走ラス。朝廷内務少
輔林友幸、陸軍少將大山巖等ヲ遣シテ之ヲ鎮撫セシム。百太郎、靜方縛ニ就キ、亂

前原一騎ノ
亂

帝國史略 附錄 第二章 明治ノ昭代 (九六一)

乃平之。舊山口藩士前兵部大輔前原一誠モ亦新政ヲ喜ハス。退キテ山口ニアリ。神風黨ノ起ルヲ聞キ、横山俊彦、與平謙輔等二百餘人ト兵ヲ募ニ起シ、將ニ縣廳ヲ襲ヒテ遙ニ之ガ應援ヲナサントス。官軍來討スト聞キ、海路山陰ニ赴カントス。山口縣令關口隆吉兵ヲ鎮臺ニ乞ヒ、萩ノ叛徒ヲ鎮壓ス。一誠俄ニ轉テ萩ヲ反襲ス。官軍力戰シテ之ヲ却ク。一誠等再遁レテ島根ニ赴キ、尋イテ縛ニ就ク。殘黨有福、尙允、小倉信一、尙萩ニアリ。陸軍少將三浦梧樓兵ヲ率キ、孟春、淺間ノ兩艦ト水陸ヨリ攻メテ之ヲ平ク。舊斗南藩士長岡久茂、岩手縣士井口慎三郎、青森縣士竹村俊秀、中原成業等東京ニアリ。遙ニ一誠ニ應セントシ、事成ラズシテ捕ヘラレ、久茂ハ獄中ニ死シ、他ハ斬ニ處セラレタリ。

長岡久茂等捕ヘラレ

○二十 節 車駕西巡 十年二月、孝明天皇ノ十年祭期ニ當ルヲ以テ、車駕京都

駐メ給フ

ニ幸シ、山陵ヲ拜シテ祭典ヲ行ヒ、遂ニ大和ノ奈良ニ幸シ、神武天皇ノ陵ニ謁シ給フ。會、西鄉隆盛等亂ヲ鹿兒島ニ起ス。因リテ蹕テ京都ニ駐メ、西南ヲ控制シ給フ。内閣顧問木戸孝允、參議大久保利通、伊藤博文等征討ノ事務ヲ處斷ス。右大臣岩倉具視、東京ニ在リテ政務ヲ處理シ、暗號電信ヲ以テ樞機ヲ往復ス。

○二十 節 西南ノ役

西鄉隆盛職ヲ辭シテ國ニ歸ルニ及ビ、私學校ヲ建テ、生徒ヲ養成ス。從フ者甚多シ。時ニ徵兵令初マテ出テ、戶山學校ヲ設ケテ將校ヲ養成ス。海軍ノ制モ亦起リ、提督府ヲ鹿兒島ニ置キ、舊藩主島津齊彬ノ先ニ創立セシ大砲及諸器械製造所集成館ヲ以テ機械所トス。陸軍モ亦製彈廠ヲ設ク。是ニ至リテ陸軍省鹿兒島ノ製彈機械ヲ大坂ニ移サントス。私學校生徒等途ニ之ヲ奪ヒ、且海軍ノ器械所ヲ掠ム。遇、警吏中原尙雄等數人鹿兒島ニ歸省ス。私學校生徒等之ヲ執ヘ、拷掠百端、遂ニ政府ノ密旨ヲ帶ビ隆盛等ヲ刺殺セントスル者ナリトシ、之ヲ隆盛ニ訴フ。是ニ於テ隆盛、利秋國幹等ト兵一萬二千ヲ率テ鹿兒島ヲ發シ、將ニ政府ニ向ヒテ問フ所アラントス。縣令大山綱良之ニ應ジ、檄ヲ飛バシテ沿道諸縣及鎮臺ニ報シ、又官金ヲ送リテ其ノ軍資ヲ助ク。是實ニ十年二月ノ事ナリ。急報京都ニ達ス。乃直ニ隆盛以下ノ官爵ヲ親ヒ、熾仁親王ヲ拜シテ征討總督トシ、陸軍中將山縣有朋、海軍中將川村純義ヲ以テ參軍トシ、陸軍少將野津鎮雄、三好重臣、三浦梧樓ヲ旅團司令長官トシテ之ヲ討タシメ給フ。熊本鎮臺司令長官谷干城、綱良ノ書ヲ得、怒リテ之ヲ斥ク。隆盛等熊本城ヲ拔ク。

四郷隆盛兵ヲ擧グ

熊本ノ城守

田原坂ノ戦

愛媛福岡中津等ノ賊盛ニ馳ス

ニアラズバ前進スルコト能ハザルヲ察シ、進ミテ城ニ薄ル。熊本ノ人池邊吉十郎等蜂起シテ之ニ應シ、四面攻撃、虛日ナシ。時ニ城外賊兵蟻集シ、急ヲ報スルニ由ナシ。谷少將乃策ヲ城守ニ決シ、之ヲ支フ。賊更ニ一隊ヲ山鹿、田原坂ニ出シテ官軍ト戦フ。殺傷甚シ。賊ノ部將篠原國幹之ニ死ス。既ニシテ官軍田原坂及植木ノ險ヲ拔キ、進ミテ賊ヲ擊退セント欲ス。賊將桐野利秋等能ク防キ、戦ヒ、退カザルコト二旬ニ及ベリ。之ヲ西南ノ役中最困難ノ時トナス。此ノ役頑民ノ蜂起シテ應援セシモノ、二月愛媛ニ武田、飯淵等アリ。事成ラズシテ縛セラル。三月福岡ニ越智武部等アリ。福岡城ヲ襲ヒ、敗レテ、秋月ニ逃ンテ逮捕セラシ。同月中津ニ増田、後藤ノ徒アリ。中津ノ市街ヲ燒キ、縣廳ヲ襲ヒテ利アラズ。遁レテ賊軍ニ投ゼシ者等アリキ。然レドモ皆其ノ勢微弱ナリシヲ以テ、直ニ之ヲ鎮壓スルヲ得タリ。二月二十六日、議官柳原前光ヲ勅使トシ、陸軍中將兼參議黒田清隆等ト鹿兒島ニ赴キ、島津久光ニ諭シテ、激徒ヲ鎮定セシメラル。乃砲臺ヲ毀テ、砲門ヲ塞キ、造船所ヲ破壊シ、賊ノ糧仗船舶ヲ沒收シ、中原尙雄等ノ囚ヲ解キ、大山綱良ヲ拘ヘ、岩村通俊ヲシテ之ニ代ラシム。三月、黒田清隆ヲ征討參軍トシ、八代ヨリ

熊本城ノ圍解ク

官軍城山ヲ陷レ亂平ケ

拔刀隊

上陸シ、熊本ノ敵背ヲ衝カシム。是ヨリ先、賊兵熊本ヲ圍ミ、攻撃甚急ナリ。城兵善ク防キ、拔ケザルコト五旬。城中糧食彈藥幾盡キ、陷没近キニアリ。會、黒田中將ノ一軍八代ヨリ宇土ニ出テ、敵背ヨリ起リテ砲撃シ、以テ熊本城ノ應援ヲナス。四月八日、少佐奥保鞏兵一大隊ヲ率テ、城ヲ出テ、圍ヲ衝キテ宇土ノ軍ニ合シ、城中ノ情况ヲ具申ス。是ニ於テ先山川中佐ノ一隊ヲ城中ニ送り、始メテ内外ノ連絡ヲ通ズ。既ニシテ高瀬口三好少ノ官軍モ亦城ニ入り、威大ニ振フ。是ニ於テ賊勢漸衰ヘ、連戦連敗シテ日向ニ走ル。官軍之ヲ追撃ス。六月、官軍進ミテ人吉、重岡及ヒ出水ヲ破リ、七月、佐土原延岡ノ諸城ヲ陷ル。八月、諸口ノ官軍、餓肥ニ集リ、大舉シテ之ヲ破ラントス。隆盛等勁兵數百ト、夜ニ乘ツテ愛、嶽ノ險ヲ險ニ、圍ヲ衝キテ鹿兒島ニ入り、城山ニ據ル。餓肥ノ賊數萬人既ニ首領ヲ失ヒ、事ノ成スベカラザルヲ察シ、遂ニ官軍ニ降ル。官軍城山ヲ圍ミ、發セザルヲ十數日。九月廿四日午前四時、三發ノ號砲ヲ以テ全軍ノ總進撃ヲナシ、終ニ隆盛以下ノ首級ヲ得、亂始メテ平ク。之ヲ丁丑ノ亂ト云フ。是ヨリ先、廢刀ノ令ヲ出ダシ、嚴ニ之ヲ禁マタリシニ、此ノ役壯兵ヲ陸軍ニ附シテ日本刀ヲ携帯セシメ、拔刀隊ト名ヅクル

應募隊

(九六六)

博愛社
臨時裁判所

死亡及軍費

征討費借入金

モノヲ編制ス。又警視廳ニ命ジ、巡查八千餘人ヲ募リ之ヲ應募隊ト名ヅケテ各地ノ警備ニ任マ、且戰鬪ノ準備ヲナサシメタリ。戰爭中創傷者ハ附近ノ病院ニ送リテ之ヲ治療セシム。皇太后、皇后ハ親シク綿撤絲ヲ製シテ之ヲ賜ヒ、天皇ハ大坂病院ニ親臨シテ之ヲ慰諭シ給ヒタリ。元老院議員佐野常民、大給恒等、總督ニ請ヒ、博愛社ト云ヘルモノヲ創メ、戰地ニ病院ヲ設ク、官職ヲ論ゼズ、負傷者ヲ治療ス。是即現時ノ日本赤十字社ナリ。亂平クニ及ビ、臨時裁判所ヲ福岡ニ設置シ、元老院幹事河野敏鎌ヲシテ之ヲ斷ゼシメ、大山綱良、池部吉十郎等以下凡四萬三千人ヲ處刑ス。此ノ役官兵ヲ出スト、六萬餘人死亡スル者六千四百七十八人、負傷スル者九千五百二十三人、叛徒凡三萬餘ニシテ、死亡スル者一萬餘人アリ。七閱月間ノ軍費四千五百五十六萬七千七百二十八圓ニシテ、間接ノ損害ハ其ノ幾何ナルヲ知ラズ、其ノ損スル所至大ナリト謂フベシ。初メ軍費ヲ要スル、非常ナリシヲ以テ、參議大隈重信議ヲ上リ、華族ヲ德應シテ華族銀行ヲ立テシメ、資本金ノ内千五百萬圓ヲ借リ、紙幣發行ヲ許シテ以テ之ニ充ツ。名ヅケテ第十五國立銀行ト云フ。當時所謂征討費借入金即是ナリ。

勳章、股ケ
文武ノ功ヲ
賞シ給フ

○二十勳章 是ノ年七月、車駕東還ス。初メ朝廷賞牌八級、及從軍牌ヲ製シ之ヲ授與シ來リシニ、前年ニ至リ、之ヲ勳章、從軍記章ト改メ、勳章八級ヲ設ク、乃之ヲ臺灣及佐賀ノ亂等ニ勳功アリシ者ニ賜フ。十月、征討總督熾仁親王以下東京ニ凱旋ス。十一月、詔シテ熾仁親王ヲ大勳位ニ叙シ、菊花大綬章ヲ授ク、其ノ他勳功アリシ陸海軍ノ將校等ニ勳ヲ授ク、金ヲ賜フコト各差アリ。又維新以來ノ文勳アル者ヲ擢テ、勳一等ニ叙シ、旭日大綬章ヲ授ク、賜フ。其ノ他勳章ヲ賜フコト各差アリ。

木戸老九

大久保利通

○三十節 木戸及大久保 是ヨリ先内閣顧問木戸孝允、陪從シテ京師ニアリ。西南ノ役起ルニ及ビ、專心神ヲ勞シテ事ニ當ル。四月、宿病ヲ發シ、五月、旅館ニ寤ズ。年四十二。孝允維新ノ際、王事ニ勤勞シ、其ノ功少カラズ。而シテ未薩賊ノ平定ヲモ見ルニ及バズシテ薨ゼリ。天皇哀悼シ、使ヲ遣シ、正二位ヲ贈リ、給フ。其ノ詔ニ曰ハク、公誠忠愛、夙傾心于皇室、獻替規畫、大展力於邦猷、圖維新之洪回、襄中興之偉業、功全德豐、有始有終、洵是國之柱石、實爲朕之股肱、茲聞溘亡、曷勝痛悼、因贈正二位、併賜金幣ト。大久保利通モ亦維新ノ元勳ナリ。木戸、西郷ト併ヒテ明

明治ノ三豪傑

島田一耶等
大久保利通
ヲ刺ス

諸藩補ノ任

近衛砲兵
ヲ作ス

(九六八)

治ノ三豪傑ト稱セラル。征韓論起ルニ及ビ、利通頻ニ其ノ不可ナルヲ論ゼシヲ以テ、廟議一變シテ、隆盛ノ議行ハレズ、其ノ結果終ニ丁丑ノ亂トナレリ。島田一郎曾テ隆盛ニ從ヒ、具ニ當時ノ事ヲ聞ク。城山滅亡ノ後、一郎隆盛ノ爲ニ怨ヲ利通ニ報ゼント欲シ、十一年五月、斬森狀ヲ作リテ、利通ノ罪狀ヲ責メ、其ノ徒長連蒙、杉本乙菊、杉村文一、淺井藩篤、脇田巧一等ト、紀尾井坂下ニ要シ、其ノ登朝ヲ待チテ之ヲ刺殺ス。利通時ニ年四十九、天皇之ヲ追悼シ、勅使ヲ遣シテ弔ヒ給フ。詔ニ曰ハク、忠純許國、策鴻圖於復古、公誠奉君、贊丕績於維新、剛毅不撓、外樹殊勳、英明英斷、內奏偉勳、洵是股肱之良、實爲柱石之臣、茲聞溘亡、曷勝痛悼、仍贈右大臣正二位、並賜金幣五千圓ト。五月、伊藤博文ヲ内務卿ニ、西郷從道ヲ文部卿ニ、河村純義ヲ海軍卿ニ任シ、六月、森有禮ヲ外務大輔ニ任シ、七月、井上馨ヲ工部卿ニ任ズ。大藏卿大隈重信、陸軍卿山縣有朋、司法卿大木喬任故ノ如シ。

○二十節 竹橋暴動

十一年八月、近衛砲兵三添卯之助、小島萬助等、西南ノ役ニ從ヒシ者、明年ニ至レドモ、賞與ヲ受ケズ、却リテ減俸ノ說アリシヲ以テ、兵卒二百餘人ト夜ニ乘ジテ砲ヲ放チ、週番士官ヲ殺シテ竹橋ノ兵營ヲ脱シ、禁闕ニ

至リテ訴フル所アラントス。近衛鎮臺ノ兵之ヲ伐チ、即夜事平ク、乃巨魁以下五十三人ヲ越中島ニ於テ銃殺ノ刑ニ處ス。

○二十節 農商獎勵及交通

鹿兒島ノ亂既ニ平キダリト雖、朝廷ニハ尙財政整理ノ一大事業アリ、當路者日夜之ヲ處理ス。乃内經費ヲ節減シ、外殖産工業ヲ盛ニシテ以テ金融ノ便ヲ計テント欲シ、十年、内國勸業博覽會ヲ東京ニ開キ、十一年、又佛國巴里、及濠洲メルボルン等ノ大博覽會ニ出品シテ、産物ノ改良及輸出ノ増額ヲ計リタリ。交通ノ業ハ、六年ヨリ米國太平洋郵船會社ガ太平洋及支那海間等ノ郵便線路ヲ航行スルノミナリシヲ以テ、政府三菱會社ニ瀛船四艘ヲ貸與シテ、橫濱上海ノ交通ヲ開カシメ、七年、更ニ十三艘ヲ貸與シ、保護年金二十五萬圓ヲ與ヘテ、遂ニ太平洋郵船會社ノ日本支那間ノ航路ヲ買ヒ求メシメタリ。八年、外國ニ發スル書信ハ、我が郵券ヲ以テ往復スルコトヲ得シム。全年驛遞局、萬國郵便聯合ニ同盟シ、電信局、萬國電信聯合ニ同盟シ、各國トノ交通ヲ容易ナラシメタリ。

○二十節 沖繩縣設置

十二年四月、琉球藩ヲ廢シテ沖繩縣トナシ、舊藩主尙

帝國史略 附錄 第二章 明治ノ昭代

(九六九)

内國勸業博覽會

郵船事業ヲ開ク

各國トノ交通ヲ容易ニス

琉球藩ヲ廢
シテ沖繩縣
トス

西洋人多ク
來遊ス

泰ヲ東京ニ住セシメ、金祿二十萬圓ヲ賜フ。琉球ハ、我カ南洋ニアル十二島ノ一ナリ。初メ我ガ屬地ナリシカド、後支那ニ朝貢シタルヲ以テ、其ノ所屬分明ナラザリキ。臺灣ノ役アルニ及ビテ、清國異議ヲ唱ヘタリシカドモ、大久保利通使シテ之ヲ辨論シ、終ニ其ノ所屬ヲ分明ナラシメタリ。是ニ至リ改メテ沖繩縣トナシ、鍋島直彬ヲ縣令トス。清國之ヲ聞キテ再異論ヲ起ス。米國前大統領グラント會、東洋ニ漫遊シ、乃兩國ノ間ニ斡旋シテ、其ノ紛議ヲ解ク。グラントノ東京ニ來レルトキ、朝廷之ヲ優遇シ、人民モ亦醴金シテ之ヲ歡迎セリ。是ヨリ日本ニ來遊スル國賓及貴紳ノ士漸多カリキ。十四年ニ至リ、布哇國皇帝親シク來遊シタリ。

第三章 立憲君主政體確立

○一 民權論起ル 明治六年、政規制定、民權院設立等ノ議起リシ以來、人民ノ政治思想ヲ有スルモノ、或ハ新聞ニ、或ハ演說ニ、頻ニ民權論ヲ主張シ、殆其ノ極ヲ知ラサリキ。而シテ臺灣佐賀、熊本、秋月、萩、鹿兒島等ノ戰亂、並ニ江華灣ノ事變等相續キテ起リシヲ以テ、其ノ說一時中絶セリ。九年ニ至リ、板垣退助政府ト說ヲ異ニシ、島津久光ト同時ニ職ヲ辭シ、高知ニ歸リテ民權論ヲ主唱ス。是ノ時ニ當リテ高知ニハ立志、靜儉、中立ノ三社アリテ、民權、保守、中立ノ三派ニ分レ、互ニ相對峙シテ扞制セリ。退助ノ土佐ニ歸ルニ及ビ、先學校ヲ設ケ、法律研究所ヲ開キ、專少年ノ勸誘教導ヲ計リタリ。故ヲ以テ遙ニ此ノ地ニ來遊スル者頗多ク、民權論者ハ皆望ヲ高知ニ屬シ、高知ハ殆民權論ノ燒點トナリタリ。是ニ於テ暫ク廢絶セル愛國社ヲ再興シ、遊說員ヲ四方ニ派シテ、普ク其ノ旨ヲ告ケ廣ク同志ノ士ヲ募レリ。十二年十一月愛國社員大坂ニ會シ、國會開設ノ請願書ヲ天皇陛下ニ奉ラント欲シ、河野廣中、杉田定一、北川貞彦ヲシテ全國ニ遊說

高知民權論
ノ燒點トナ

國會請願者
ノ嚆矢

セシメ、且各地ノ有志者ヲシテ請願書ニ連署セシメタリ。是實ニ一時ノ波瀾ヲ起シタル國會請願者ノ嚆矢ナリ。十三年一月、岡山縣ノ有志者モ、亦國會開設ノ建白書ヲ奉リ、檄ヲ天下ニ飛バシテ、大ニ人心ヲ鼓動セシメタリ。全月、福岡共愛會ハ國會開設條約改正ノ二件ヲ建白ス。三月ニ至リ、愛國社ハ二府二十二縣ノ有志者八萬有餘人ノ連署ヲ以テ請願書ヲ奉呈シタリ。然レドモ政府ノ權限以外ニ涉リシヲ以テ受納セラレズ。遂ニ其ノ志ヲ果スヲ得ザリキ。後愛國社ヲ改メテ國會期成同盟會ト云ヒ、再改メテ大日本國會期成有志公會ト稱ス。國會開設ノ勅諭下ルニ及ビ、其ノ目的ヲ一變シ、國會開設後ノ研究ニ從事スルコト、セリ。今ノ所謂自由黨ハ、即此ノ會合ノ改名シタルモノナリ。既ニ此ノ如クナリシヲ以テ、各地ノ有志者相繼ギテ起リ、國會開設ノ請願ヲナス者東京ニ鳴集シ、新聞ニ演說ニ其ノ說ヲ主張シ、都下騷然タリ。四月、集會條例ヲ發布シテ公會ヲ制限シ、屋外ノ集會ヲ禁ズ。十二月ニ至リ、更ニ令シテ曰ハク、凡人民ノ上書、一般ノ公益ニ關スルモノハ、何等ノ名目ヲ以テスルニ拘ラズ、揮ベテ建白トシ、元老院ニ於テ取リ扱ヒ候條、管轄廳ヲ經由シテ同院ニ差シ出スベシト之

(九七三)

自由黨

集會條例

上書ノ制

ニ依リテ一時東京ニ集リシモノ漸次離散シタリ。然レドモ、其ノ希望ハ決シテ變更スルコトナク、地方ノ建白書元老院ニ送付セラレシモノ、實ニ山ノ如クナリキト云フ。

○二車駕北巡及國會開設ノ詔 十四年七月、天皇與羽及北海道ニ巡幸シ給フ。時ニ開拓使官有物拂下ノ事アリ。新聞紙ハ之ヲ痛論シ、民權論者ハ

天島北海道
ニ巡幸シ給
フ

開拓使官有
物拂下ノ事

之ヲ奇貨トシテ益、國會開設ノ必要ナルヲ論シ、四方騷然タリ。十月、天皇東京ニ還幸シ給ヒ、即夜御前會議ヲ開キ、翌開拓使ノ拂下ヲ止メ、同時ニ明治二十三年ヲ期シテ國會ヲ開設スベキコトヲ天下ニ告シ給フ。其ノ詔ニ曰ハク、朕祖宗二千五百有餘年ノ鴻緒ヲ嗣ギ、中古紐ヲ解クノ乾綱ヲ振張シ、大政ノ統一ヲ總攬シ、又夙ニ立憲ノ政體ヲ建テ、後世子孫繼シベキノ業ヲ爲サント期ス。曩ニ明治八年ニ元老院ヲ設ケ、十一年ニ府縣會ヲ開カシム。此皆漸次基ヲ創メ、序ニ循ヒテ歩ヲ進ムルノ道ニ由ルニ非ラザルハ莫シ。爾有衆亦朕ガ心ヲ諒トセン。願ミルニ立國ノ體、國各宜シキヲ異ニス。非常ノ事業、實ニ輕舉ニ便ナラズ。我が祖宗照臨シテ上ニ在リ。遺烈ヲ揚ケ、洪謨ヲ弘メ、古今ヲ變通シ、斷ツテ之ヲ行フ、

國會開設ノ

大隈重信等
改進黨ヲ組
織ス
自由黨
立憲帝政黨

徵兵令ノ改
正

實朕が躬ニ在リ。將ニ明治二十三年ヲ期シ、議員ヲ召シ、國會ヲ開キ、以テ朕が初志ヲ成サントス。今在廷臣僚ニ命ヲ假スニ時日ヲ以テシ、經畫ノ實ニ當ラシム。其ノ組織權限ニ至リテハ、朕衷ヲ裁シ、時ニ及ゾテ公布スル所アラントス。朕惟フニ人心進ムニ偏シテ、時會速ナルヲ競フ。浮言相動キ、竟ニ大計ヲ遺ル。是宜シク今ニ及ヒテ、謨訓ヲ明徴シ、以テ朝野臣民ニ公示スベシ。若仍コトサラニ躁急ヲ爭ヒ、事變ヲ煽シ、國安ヲ害スル者アラバ、處スルニ國典ヲ以テスベシ。特ニ茲ニ言明シ、爾有衆ニ諭スト。翌年三月、參議伊藤博文等ヲ歐洲諸國ニ遣シ、各國ノ憲法ヲ參照研究セシム。大隈重信官ヲ罷メ、河野敏鎌、前島密、北島治房、矢野文雄、沼間守一等ト改進黨ヲ組織シ、秩序的進歩ヲ執リテ二局議院論ヲ唱フ。時ニ自由黨ハ板垣退助ヲ首領トシテ、極端ナル急進主義ヲ執リ、一局議院論ヲ主張シタリ。丸山作樂、福地源一郎等兩者ニ反對シ、立憲帝政黨ヲ創設シ、互ニ機關新聞ヲ發行シテ、其ノ所説ヲ輿論ニ訴ヘ、彼此相論難辯駁セリ。

○三 武官ニ訓諭ス 徵兵令ヲ改正シ、免役料ヲ廢シ、猶豫ノ項目ヲ減サ、全國皆兵ノ主義ヲ擴張シ、且詔ヲ下シ、軍人タル者ハ、忠節ヲ盡スヲ本分トスベキ

軍人ノ救護
海軍公債

コト、禮義ヲ正シクスベキコト、武勇ヲ尙フベキコト、信義ヲ重ゾズベキコト、質素ヲ旨トスベキコトヲ訓諭セラル。尋イテ諸省ニ節減ヲ行ハシメ、又海軍公債ヲ募集シテ軍艦ヲ増設セントス。是ニ於テ民間海防費ヲ獻ズル者アリ。其ノ額千圓以上ノモノヲ受ク、位記及綬章ヲ賜ヒテ之ヲ旌表ス。

朝鮮暴徒我
が公使館ヲ
燒ク

○四 朝鮮ノ變 其ノ 十五年七月、朝鮮内亂アリ。暴徒等遂ニ我が公使館ヲ襲

朝鮮ノ假金
ヲ出シテ平

ヒ。火ヲ放チテ呼譟ス。辨理公使花房義質其ノ衆二十八人ト遁レテ仁川ニ至リ、再之ヲ濟物浦ニ避ク。英船ニ投テ長崎ニ還ル。事聞ス。朝廷乃軍艦數艘ヲ發シテ我が在留人民ヲ保護セシメ、外務卿井上馨ヲ赤間關ニ遣シテ命ヲ傳ヘ、陸軍少將高島綱之助、海軍少將仁禮景範ヲシテ、兵ヲ率テ義質ヲ護シテ朝鮮ニ赴カシム。義質國王ニ謁シテ數事ヲ要求シ、遂ニ規約六條、修好續約二條ヲ議定ス。後朝鮮國書方物ヲ獻ツ、金五萬圓ヲ遭難者ノ遺族及負傷者ニ給卹シ、五十萬圓ヲ損害及衛兵費ニ補助シテ其ノ暴舉ヲ謝シ、事平ク。後我が代理公使ノ赴任スルニ及ビ、補助金四十萬圓ヲ還シ、又變アラントテ恐レ、歩兵二中队ヲ駐紮シテ公使館ヲ護衛セシム。清國モ亦兵ヲ派シテ朝鮮ニ屯セシメタリ。

岩倉具視

○節 岩倉右大臣薨ズ 十六年七月、右大臣岩倉具視薨ズ。天皇痛悼シ、朝ヲ止メ給フ。ト三日、陸海軍司法ニ勅シテ死刑ヲ止メシメ給フ。ト三日、太政大臣ヲ贈リ、國葬式ヲ以テ之ヲ葬ラシメ給フ。勅ニ曰ハク、大節善斷、贊旋轉之偉業、純忠持正、番彌綸之宏猷、洵是國家之棟梁、寔爲臣民義表。况朕幼冲、登祚、賴匡輔、啓沃納誨、誼均師父、天愍不遺、曷勝痛悼。其可特贈太政大臣ト。公ハ維新ノ元勳中、特ニ蓋世ノ智謀ヲ有シ、能ク英俊ヲ收攬シ、木戸、大久保、西郷等ヲシテ、其ノ材ヲ竭サシメ、遂ニ明治ノ大業ヲ成セリ。

福島新島英、城島人等ノ暴舉

○節 政黨員ノ暴舉 當時自由黨員中ニハ過激ノ徒頗多ク、十五年五月、福島縣人河野廣中、愛澤寧堅、平島松尾、澤田清之助、田母野秀顯、花香恭次郎等、施政ニ不平アリ、亂ヲ起シ、縛ニ就ク。甫メテ高等法院ヲ開キテ之ヲ處斷ス。十一月、新潟縣人赤井景韶、天誅黨盟約書ト云ヘルモノヲ章シテ、當路ノ顯官ヲ暗殺セシト欲シ、縣下ヲ奔走シ、半途ニシテ縛ニ就ク。十七年九月、茨城縣人富永正安等、其徒數百人ト加波山ニ集リ、政府ノ轉覆ヲ計リ、事成ラズシテ刑ニ處セラレタリ。其ノ他無謀ノ徒妄ニ官吏ニ抵抗シテ罪ヲ得ル者多カリキ。

爵位ノ制ヲ設ケ世襲財產法ヲ定ム

○節 華族令ヲ定ム 十七年七月、華族令ヲ定メ、公、侯、伯、子、男五等ノ爵位ヲ設ケ、舊來ノ華族及文武ノ諸臣中、維新ノ大業ヲ翼贊シ、殊勳アリテ新ニ華族ニ列セラレタル者ニ授ク。又更ニ世襲財產法ヲ設ケテ、華族ヲ保護ス。

朝鮮ノ二黨

○節 朝鮮ノ變 其ノ當時朝鮮政府ニ二黨派アリ。一ヲ日本黨ト云フ。領袖金玉均、朴泳孝等、日本ト和シテ開進ノ政ヲ行ハント欲ス。一ヲ事大黨ト云フ。清國ニ附シテ舊習ヲ墨守セント欲ス。二黨互ニ軋轢セリ。十七年十二月、事大黨ノ徒急ニ起リ、大臣數人ヲ刺殺シテ王宮ニ逼ル。王急ニ手書ヲ我が公使館ニ寄セテ、宮闈ノ護衛ヲ請フ。辦理公使竹添進一郎等、兵ヲ率テ之ニ赴ク。暴徒及朝鮮駐劄ノ清兵合シテ之ヲ攻ム。我が兵支フルコト能ハズ、難ヲ仁川ニ避ク。暴徒ノ一隊我が公使館ヲ襲フ。陸軍大尉磯林直三等三十餘人之ニ死ス。事聞ス。十八年一月、特派全權大使井上馨ヲシテ、兵ヲ率テ往キテ其ノ罪ヲ問ハシム。朝鮮謝意ヲ表シ、兇徒ヲ嚴刑ニ處シ、我が公使館ヲ造營シ、又十一萬圓ノ損害賠償金ヲ出ダス。而シテ事清國ニ關スルヲ以テ、二月、更ニ特派全權大使伊藤博文ヲ清國ニ遣ス。博文天津ニ於テ李鴻章ト會シ、爾後兩國並ニ守兵ヲ朝鮮ニ授クコトヲ止メ、

暴徒我が公使館ヲ襲フ

朝鮮罪ヲ謝ス

天津條約

太政大臣三條實美ノ上

大政官各省ノ職制ヲ嚴

内閣ヲ組織ス

之ヲ要スル時ハ豫相通ズベキニトテ約シテ還ル天津條約即チ是ナリ

○九官制改革 維新以來屢官制ヲ改革シタリシカドモ概大寶令ニ據リ、主省アリテ各省ヲ總括セリ。伊藤博文歐洲巡行ノ後、制度取調局ヲ置キ、立憲制度實施ノ準備ヲ爲ス。經營零成ルニ及ビテ、太政大臣三條實美書ヲ上リテ職ヲ辭シ、且奏シテ曰ハク、太政官諸職ヲ廢シ、内閣ヲ以テ宰臣ノ會議所及奏上ニ關スル事ヲ處理スル所トシ、萬機ノ政專簡捷敏活ヲ主トシ、諸宰臣入りテハ太政ニ參シ、出テハ各部ノ職ニ就キ、均シク陛下ノ手足耳目トナリ而シテ其ノ中一人ヲ撰ビ、專中外ノ職務ニ當リ、旨ヲ承クテ宣奉シ、以テ全局ノ平衡ヲ保持シ、以テ各部ノ統一ヲ得シメ、實ニ祖宗簡實ノ政、親裁ノ體裁ニシテ、始メテ立憲ノ義ニ適スベシト。朝廷其ノ職ヲ容レ、從來ノ太政官、太政大臣、左右大臣、參議、各省卿等ヲ廢シ、宮中ニ内大臣、宮中顧問官ヲ置キ、更ニ内閣總理大臣、及宮内、外務、內務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、逓信ノ十一大臣ヲ置キ、宮内大臣ヲ除キ、他十大臣ヲ以テ内閣ヲ組織シ、伊藤博文ヲ以テ總理大臣トス。是實ニ十八年十二月ナリ。全月、官守ヲ明ニシ、撰叙ヲ精クシ、繁文ヲ省キ、冗費ヲ節シ、規律ヲ嚴ニス

樞密院ヲ置ク
市町村制ヲ定ム

宮城廢ル

ベキニトテ各省大臣ニ示シ、試驗法ヲ以テ文官ヲ選叙シ、年勞進進ノ弊ヲ挽ク法律勅令ハ、官報シ、^{十六年七月}太政官每日之ヲ刊行シ、以テ之ヲ布告シ、到達ノ後七日ヲ施行ノ期限トス。二十一年四月、樞密院ヲ置キ、元勳及練達ノ人ヲ撰ミ、國務ヲ諮詢シ、以テ天皇ノ至高顧問府トス。此ノ年、市町村制ヲ定メ、地方共同ノ利益ヲ進メ、且其ノ權義ヲ保護セシム。後二十三年五月ニ至リ、府縣制郡制ヲ定メ、地方自治ノ端緒ヲ開ク。

○十宮城 初メ天皇東幸シ給ヒシトキ、江戸城ヲ以テ皇居ト定メラレキ。後六年五月、祝融ノ災アリ、乃赤阪ニ假皇居ヲ設ケラル。十七年ニ至リ、宮城地ヲ舊西丸ニトシ、七月ヲ以テ工ヲ起シ、二十一年十月遂ニ成ル。内閣、宮内省其ノ内ニアリ。二十二年一月十一日、天皇並ニ皇后新宮城ニ徙御シ給フ。乃赤阪假皇居ヲ以テ離宮トシ、東宮ノ御所トス。而シテ皇太后ハ尚青山御所ニ坐セリ。

○十一大日本帝國憲法 是ヨリ先伊藤博文ヲ泰西諸國ニ遣シ、其ノ國法ヲ研究セシメ、之ヲ斟酌シテ大日本帝國憲法ヲ起草シ、樞密院ニ附シ、各顧問官ヲシテ之ヲ審查セシメ、終ニ憲法ヲ定メラル。二十二年二月十一日、即神武天皇

憲法發布ノ御告文

(九八〇)

即位紀元二千五百四十九年ヲ以テ、天皇先賢所ヲ祀リ皇靈ニ告祭シ給ハク、皇
 朕ノ謫ミ畏ミ皇祖皇宗ノ神靈ニ誥ケ白サク、皇朕レ天壤無窮ノ宏謀ニ循ヒ、惟
 神ノ寶祚ヲ承繼シ、舊圖ヲ保持シテ、敢テ失墜スルコトナシ。顧ミルニ世局ノ進
 運ニ騰リ、人文ノ發達ニ隨ヒ、宜シク皇祖皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニシ、典憲ヲ成立シ
 條章ヲ照示シ、内ハ以テ子孫ヲ率由スル所ト爲シ、外ハ以テ臣民翼贊ノ道ヲ廣
 メ、永遠ニ遊行セシメ、益、國家ノ丕基ヲ鞏固ニシ、八洲民生ノ慶福ヲ増進スベシ。
 茲ニ皇室典範及憲法ヲ制定ス。惟フニ此レ昔皇祖皇宗ノ後裔ニ貽シタマヘル
 統治ノ洪範ヲ紹述スルニ外ナラズ、而シテ朕ガ躬ニ逮ヒテ、時ト俱ニ舉行スル
 コトヲ得ルハ、洵ニ皇祖皇宗及我が皇考ノ威靈ニ倚藉スルニ由ラザルハ、無シ
 皇朕レ仰キテ皇祖皇宗及皇考ノ神祐ヲ禱リ、併セテ朕ガ現在及將來ニ臣民ニ
 率先シ、此ノ憲章ヲ履行シテ、愆ヲザラムコトヲ誓フ。庶幾ハクハ神靈此レヲ鑒
 ミタマヘト。 遷幸ノ後憲法發布式ヲ宮中ニ施行シ給フ。乃皇族、華族、各大臣以
 下、勅委任官、地方長官、縣會議長ヲシテ、其ノ席ニ參列セシメ、天皇親シク憲法ヲ
 取リテ、內閣總理大臣伯爵黑田清隆ニ授與シ給ヘリ。詔ニ曰ハク、朕國家ノ隆昌

憲法發布式

憲法發布ノ勅詔

ト、臣民ノ慶福トヲ以テ中心ノ欣榮トシ、朕ガ祖宗ニ承クルノ大權ニ依リ、現在
 及將來ノ臣民ニ對シ、此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス。惟フニ我が祖我が宗ハ、我が臣
 民祖先ノ協力輔翼ニ倚リ、我が帝國ヲ肇造シ、以テ無窮ニ垂レタリ。此レ我が神
 聖ナル祖宗ノ威德ト、並ニ臣民ノ忠實勇武ニシテ、國ヲ愛シ公ニ殉ヒ、以テ此ノ
 光輝アル國史ノ成跡ヲ貽シタルナリ。朕我が臣民ハ、即チ祖宗ノ忠良ナル臣民
 ノ子孫ナルヲ回想シ、其ノ朕ガ意ヲ奉體シ、朕ガ事ヲ獎順シ、相與ニ和衷協同シ、
 益、我が帝國ノ榮ヲ中外ニ宣揚シ、祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ希望
 ヲ同シシシ、此ノ負擔ヲ分ツニ堪アルコトヲ疑ハザルナリト。 又議院法、選舉
 法、會計法、貴族院令ヲ發セラレ、又皇室典範ヲ定メラル。 憲法ノ發布ハ、上ハ天
 皇ヨリ、下ハ萬民ニ至ルマデノ權利義務ヲ確定シ、立憲政治ノ實體ヲ舉ゲラル
 ハ、モノナルヲ以テ、天下萬民舉リテ之ヲ祝賀シ、帝國ノ益、鞏固ニシテ寶祚ノ益、
 無窮ナラシムコトヲ仰望シ、鼓腹擊壤ノ歡ヲ盡セリ。 天皇皇后ト俱ニ青山練兵
 場ニ臨ミ、觀兵式ヲ舉ゲサセ給フ。億兆其ノ鹵簿ヲ拜セント欲シ、御通路ニ蟻集
 シテ甚雜闊ヲ極メタリ。此ノ日、岩倉具視、島津久光、大久保利通、木戸孝允、毛利慶

憲法令及皇室典範

大教禮位及
養老ノ典

明宮ヲ皇太子
ニ立テ給フ

帝國議會開
院式

貴族院

衆議院

(九八二)

親、鍋島直正、山、内豐信ノ墓ニ告ケ、國事犯ヲ大赦シ、西郷隆盛、藤田彪等維新ノ大業ニ功アリシ者ニ位ヲ贈リ、八十歳以上ノ者ニ金ヲ賜フ。即夜天皇群臣ヲ豐明殿ニ召シテ宴ヲ賜ヒ發布式ニ參列セル者ニ憲法發布紀念章ヲ賜ヘリ。

○十二 皇太子冊立 二十二年十一月三日、即天長節ノ佳辰ヲ以テ、儲君、明宮嘉仁親王ヲ立テ、皇太子トシ、大勳位菊花大綬章ヲ授ケ、古典ニ從ヒテ壺切ノ劍ヲ傳ヘ給フ。勅シテ宜ハク、盡切ノ劍ハ、歷朝皇太子ニ傳ヘ、以テ朕ガ躬ニ道ベリ、今之ヲ汝ニ傳フ。汝其レ之ヲ體セヨト。乃宮内省ニ東宮職ヲ置キ、其ノ官制ヲ定メラル。是ノ日臣民ノ賀表ヲ上リ、詩歌ヲ獻ズルモノ多カリキ。

○十三 帝國議會 二十三年十一月、天皇貴族院ニ臨御シ、帝國議會開院式ヲ行ハセ給フ。伯爵伊藤博文ヲ貴族院議長ニ、伯爵東久世通禧ヲ副議長ニ、中島信行ヲ衆議院議長ニ、津田真道ヲ副議長ニ任セラル。貴族院ハ皇族十人、公爵十人、侯爵二十一人、伯爵十五人、子爵七十人、男爵二十人、勅撰議員六十一人、各府縣多額納稅議員四十五人通シテ二百五十二人ヨリ成リ、衆議院ハ撰舉法ニ基キ、各府縣ヨリ撰舉シタル議員三百ヨリ成レリ。

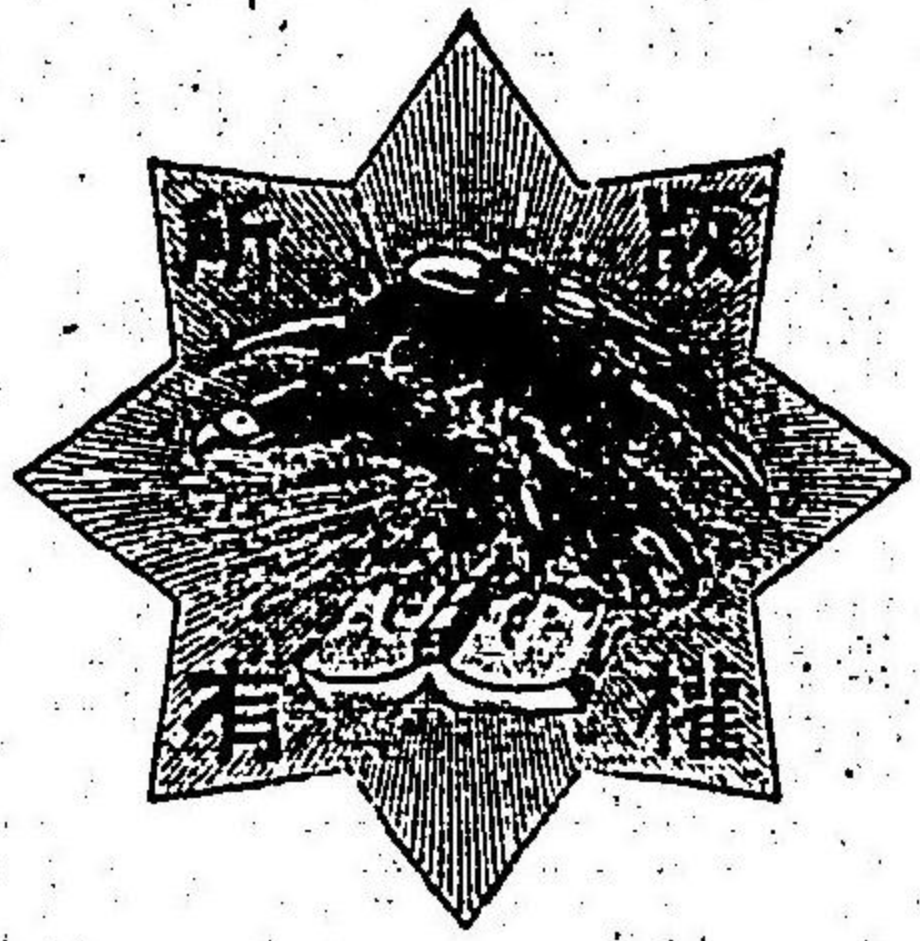
訂增 帝國史略 下卷終

帝國史略 附錄 第三卷 立憲君主政體確立

(九八三)

明治三十年九月廿八日版權讓受印刷
 明治三十年九月卅一日發行
 明治三十一年七月一日四版發行

(帝國史學)
 定價金壹圓七拾錢



編輯者 有賀長雄

發行者 大橋新太郎

印刷者 愛敬利世

印刷所 株式會社秀英舍

發兌元

東京市日本橋區
 本町三丁目

博文館

高等師範秋野由之先生著

(沼澤地) 文部省
 國庫入 檢定済

中等 日本歴史

全二冊洋裝背皮 正文金壹圓拾錢
 金文字入類美本 郵税十六錢

著者の我國史學に深きとは世皆已に之を知る。本書は筆を日本の地形、建國の體裁、政治の變遷に起し、進みて太古史、近古史に及び、遂に廿七八年戰役、臺灣鎮定に終る。而して各史編未だ附するに、制度風俗の沿革を以てす、文辭明快、敘事富麗、而して特に前版の註漏を正し、最も現今の中等教育程度に適切ならんとに意を用ひられたるものなれば、中學校師範學校其他中等教育程度の學校教科書として、最も適當の良書なり、其紙質の良好、印刷の鮮明、製本の堅牢なる、亦前版に比して更に一層の改良を施せり。

秋野由之先生著

中等 日本歴史要解

全一冊洋裝上製 正文金五拾錢郵税八錢
 紙數四百頁

柏軒 松井廣吉先生著

新撰 大日本帝國史

全壹冊大判洋裝 正文金四拾錢
 紙數五百八拾頁 郵税拾錢

日本歴史中、最も多く賣れ行きたるは實に本書なり。今や又大訂正を加へて益々完全のものとし、且つ空前の偉業として帝國歴史の一大盛觀たる征清戰の顛末を叙し、開戰の原因、海陸の諸戰、講和、凱旋、行賞、臺灣平定に至るまでを、細を擧げ、要を擧げ、簡潔の文を以て之を記し、以て大日本帝國の歴史を完ふせり。

文部大學 栗田寛先生校閱
 第一高等師範 增田于信先生著

新撰 日本小歴史

全壹冊大判洋裝 正文金拾五錢
 紙數二百頁密圖入 郵税六錢

我が國史に精通せる増田先生が筆を執り、史學の老練栗田先生の校閱を受けたる完全なる歴史にして、神代の昔より征清戰の顛末及臺灣征伐に至るまで、綱を擧げ目を立て最も秩序よく、最も簡明に記述しある良史なり。

三島中洲先生校閱 山名善讓先生訓點

資治通鑑

全部二百九十四卷 紙數五千五百餘枚
合十帙七拾冊 和裝木版刷美本

正價全部金拾三圓 量目三貫目

温公の資治通鑑、周の威烈王に始まり、兩漢六朝、唐を経て五代に至り、後周の顯宗に終るまで、歳を経る一千三百餘年、冊を重ねる二百九十四卷、治亂興亡隆替盛衰の跡、炳然として火を見るが如し。左國史漢の後、實に獲難き其史なり、校正細密、印刷鮮明、從來行けるもの、比に非ず、幸に對覽を賜へ。

大槻東陽先生校訂

春秋左氏傳校本

全部十五冊和裝日本紙木版刷頗美本

正價金貳圓貳拾錢 量目六百目

安藤定格先生纂釋

史記讀本

全部二十冊木版唐裝美本 印刷鮮明
正價金三圓 量目八百目

司馬遷は東洋風俗の文豪なり。其一生の心力を盡くして一書史記の中にあり、史記は馬遷の極刑に觸れ、憤憤志を立て、筆を執れるもの、支那開國以降漢代に及ぶまで、内外の事歴盡さるるなし、凡そ史傳の評を得しもの、東洋に在つては未だ史記に優さるものなく、特に其文の妙なる、千秋の史筆一として之に及ぶはあらず、雄大渾厚、放縱自在、森嚴精選、斯文の妙を極盡す、故に史記は昔一個の歴史なるのみならず、實に至妙の名文章なり、文を學ぶもの、心を潜めて之を讀まば、造詣する所殊に深からん。

近藤瓶城先生評註

萬國十八史略評註

全七冊木版和裝 正價一圓廿錢 郵稅貳拾錢

石川鴻齋先生校訂

五代史

全八冊木版和裝 正價一圓十錢 郵稅十八錢

矢士錦山先生訓點

廿二史言行略

全六冊木版和裝 正價金壹圓 郵稅拾二錢

英國ロバート、マクケンザード氏著
文學士 幸田成友君譯

十九世紀史

全壹冊洋裝大判 紙數五百頁美本 正價金五拾錢 郵稅拾貳錢

學問の進歩、自由主義の發達、學問應用の器械、船舶鐵道等の發明實行を始め、列國政體の變更、社會に進歩に至る迄僅々百年間に於て、至大の變化進歩を爲し、世界を擧げて殆んど全く舊態を一換したるは、實に當十九世紀にあり、故に十九世紀の歴史は最も興味あり、又最も變化ある好歴史にして、人を啓發せしむべきもの甚だ多し。

文學士中原貞七先生著

中等萬國歷史

全二冊洋裝背皮 金文字入美本 正價金壹圓貳拾錢 郵稅拾八錢

著者中原先生は夙に歴史編纂に卓見を有するの士なり。大に從來の萬國歴史の放漫杜撰なるを慨嘆し本書を著はさる。別つて二卷とし、他は支那の歴史の中心を以て、上巻は東部諸古人種を以て、下巻は西洋文明の中心を以て、日本入種を以て、其發達實相を論じ、其の法に於て、其自信力を長し愛國の精神を鼓舞する効あるのみならず、歴史編纂の一新面を開き、東西文明の真相を發見し、其極致の融合一致するに於て、大利益を與ふる所なり。

大和田建樹先生著

新體萬國歷史

全三冊洋裝 正價一冊金拾二錢 郵稅壹圓四錢

行文流麗、叙事簡潔、一讀興味を感ぜしめ、再讀卷を棄つるに忍ばざらしむ、世に萬國歴史多し、然れども未だ曾て和文大家の手に成りたるものあらず。此書の一種特殊の妙味ある旨は予して知るべきのみ。

川崎深山先生著

魯國史

正價金參拾錢 郵稅參錢

順永金三郎先生著

英國史

正價金參拾錢 郵稅參錢

坪谷善四郎先生著

佛蘭西史

正價金參拾錢 郵稅參錢

谷口政徳先生著

應用萬國小歷史

正價金拾貳錢 郵稅壹錢五厘

加賀喜一先生著

繪入萬國歷史

正價金拾錢 郵稅四錢

羅山 林道春先生編

標記本朝通鑑

附録(皇 運 部、朝 職 部、甲 子 會 部、武 職 部)

全部八拾四冊 日本紙刷本箱入
和裝木版密刻 紙數四千七百枚
特別金拾壹圓 通運料全額金五拾錢

標記本朝通鑑は、江戸時代の儒宗たる林羅山先生の編する所、神代の昔より、後水尾天皇の元和三年に至る。首尾連貫、羅して遺らさず。日本歴史中の一巨擘たり。

今泉定助先生著 (文部省検定済)

初等日本歴史

全二冊 和装
正價金拾九錢
郵税四錢

學橋 大橋 穆先生編次

明治日本政記

全拾冊 木版 正價金壹圓六拾錢
和裝 頗美 本 通運料貳拾錢

我國古來種々の歴史あり、其體裁文章皆一得一失あるを免れず、而して其体裁の完全せる、其文章の簡雅なる、其議論の特絶なるは、實に頼山陽の日本政記を以て巨擘となす。讀む者をして、三千年の興亡治亂一讀の中に歴々として諸を掌に視るが如くならしむ。是れ此書の噴々として、後人に傳稱せらるゝ所以なり。故に我國建國以來の沿革の變遷の故を知らんと欲するものは、必ず此書を讀まざるべからず。

中山利實先生編輯 長山實先生校訂

南木誌

全五冊 木版 正價金七拾五錢
和裝 頗美 本 郵税拾貳錢

楠公一門の忠孝大節千古に赫々たり、此書は正史實錄より野乘私記に至るまで、苟くも楠家に關する遺聞逸話を悉く網羅したるものなり。一讀當年の史に通ずべく、再讀忠孝の大義を發揮すべし、人々必讀の書なり。

萩野由之先生著

日本歴史評林

全二冊 總クローズ 特別價金壹圓五拾錢
金字入大判洋裝 目方八百々

諸丹二尊大八洲を生成し、徳川幕府の末に至る。其間歴代天子の御行より名臣の言行、朝野の現象に就て、古今大家の論を集む。職見の卓抜、品徳の精選、眞に斯類の選なり、史を讀むもの必ず三讀せざるべからず。

内藤 耻叟 先生校閱
大宮 宗司 君校註

神皇正統記

全一冊 洋裝 實價金貳拾五錢 郵税六錢

小中村義象、落合直文、萩野由之三先生校訂

水鏡大鏡

合全洋裝 正價金三錢

増鏡

全一冊 洋裝 正價金三錢

大和田建樹先生著

新體日本歴史

全貳冊 洋裝 正價一冊拾貳錢 郵税壹圓四錢

面白く書かんとすれば大冊に過ぎ、小冊に纏めんとすれば簡易に偏して要領を盡さざるは、歴史編纂の通弊なり、此弊を脱して繁簡宜しきを得たるを本書とす。本書の體裁は斬新にして趣向は面白し、加ふるに和漢折衷體の文字を以て流麗に書き下したる、歴史を學ぶと同時に文章を學ぶの用に供すべし。

南梁 小宮山綏介先生編輯

徳川太平記

全貳冊 大判洋裝 正價金壹圓五拾錢
總クローズ 金字入 目方八百々

精博の學、透卓の識、特に徳川時代の史を修むるに於て、優に三長を擅得せらるゝものは、故南梁小宮山先生なり。本書は先生が群書を涉獵し、最詳確なる事實を摺摺して、編纂せられたるものにして、殊に卷首に先生の小傳を附して、出版せり。本書の精良無比なるは更に論なし。其先生を詳にして、斯書を讀まば、自ら一層の光彩を發揮することあらん也。

川崎紫山君著 (每冊高良價廉)

目 清 戰 史

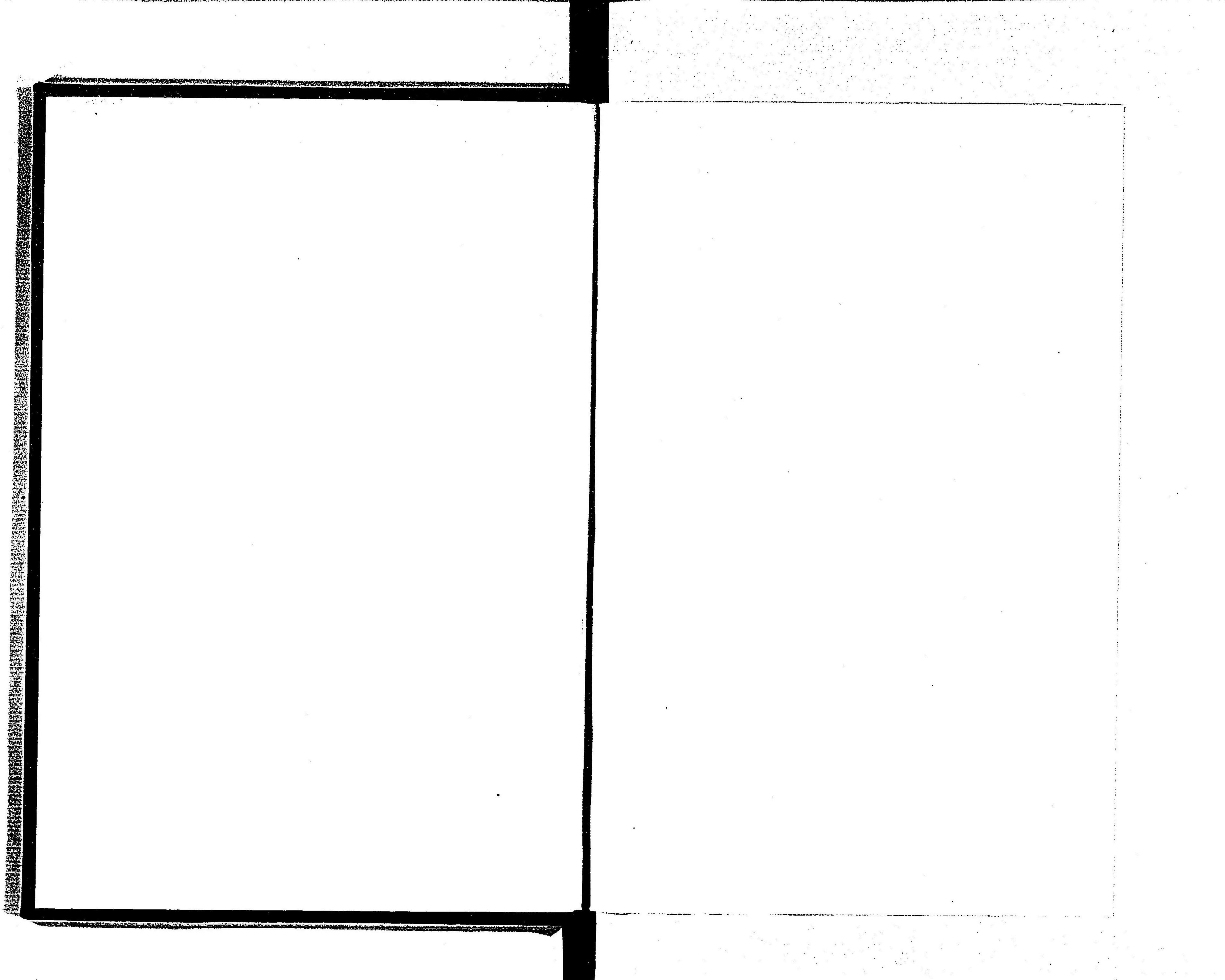
正價 二冊金三十錢 ● 三冊金八十五錢
全七冊金二圓九十錢 郵稅 冊八錢

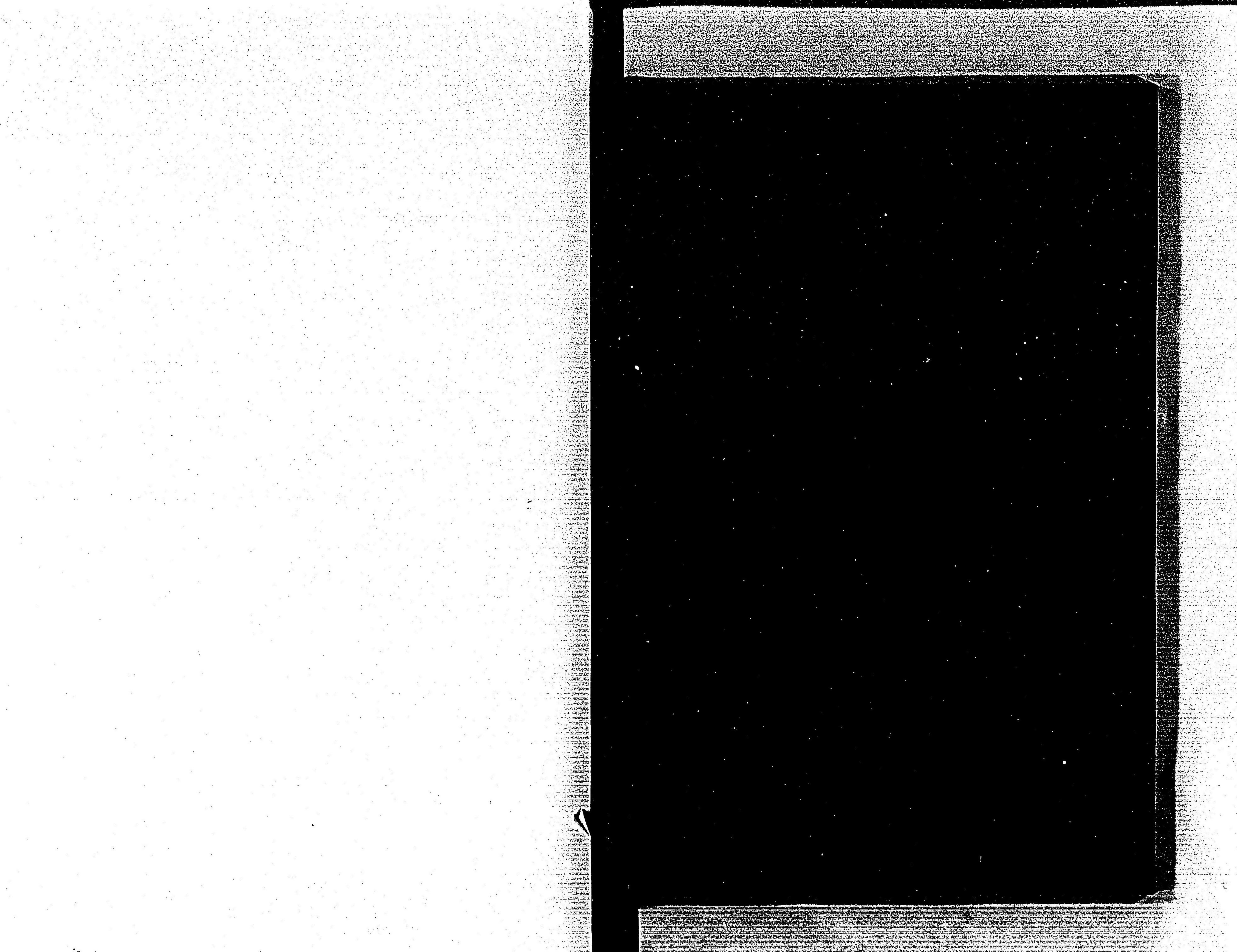
萬 國 戰 史

正價 一冊金拾八錢 ● 拾二冊金壹圓九拾
五錢 ● 全二十四冊金壹圓七拾錢 ● 郵

● 獨 佛 戰 史 川崎紫山君著
● 鴉 片 戰 史 松井柏軒著
● 破 嶺 戰 史 野々村金五郎著

第四編	征 清 戰 史	松井柏軒著
第五編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第六編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第七編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第八編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第九編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第十編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第十一編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第十二編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第十三編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第十四編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第十五編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第十六編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第十七編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第十八編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第十九編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第二十編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第二十一編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第二十二編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第二十三編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第二十四編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第二十五編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第二十六編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第二十七編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第二十八編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第二十九編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第三十編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第三十一編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第三十二編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第三十三編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第三十四編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第三十五編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第三十六編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第三十七編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第三十八編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第三十九編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第四十編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第四十一編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第四十二編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第四十三編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第四十四編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第四十五編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第四十六編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第四十七編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第四十八編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第四十九編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第五十編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第五十一編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第五十二編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第五十三編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第五十四編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第五十五編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第五十六編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第五十七編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第五十八編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第五十九編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第六十編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第六十一編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第六十二編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第六十三編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第六十四編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第六十五編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第六十六編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第六十七編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第六十八編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第六十九編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第七十編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第七十一編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第七十二編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第七十三編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第七十四編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第七十五編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第七十六編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第七十七編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第七十八編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第七十九編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第八十編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第八十一編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第八十二編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第八十三編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第八十四編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第八十五編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第八十六編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第八十七編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第八十八編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第八十九編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第九十編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第九十一編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第九十二編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第九十三編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第九十四編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第九十五編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第九十六編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第九十七編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第九十八編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第九十九編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著
第一百編	露 士 海 戰 史	松井柏軒著





000834-000-2

210, 1-A748th (th)

帝国史略

有賀 長雄

M31

ACB-2052



